

世界遺産登録の光と影

米田文孝

現在、世界遺産リストには878件（2008年7月現在）の登録があり、インド共和国内では27件（文化遺産22件、自然遺産5件）の世界遺産が登録されている。さらに、ここで話題にする石窟寺院では、1983年に登録されたアジャンター石窟とエローラー石窟、1987年に登録されたエレファンタ石窟の3件がある。

1880年代、世界遺産に登録された文化遺産や自然遺産には外国人観光客の訪問が増加したが、1990年代にインド政府の経済政策が転換された結果、急激な経済発展と新興富裕層の増加を生じ、国内観光客も急増した。この状況に歩調を合わせて、登録遺跡では保存修復対策と観光施設化対策、特に後者が積極的に進められるようになった。

例えば、アジャンター石窟では都市・遺跡間の道路整備や壁画の保存修復事業とともに、自家用車の急増に対応したP&R（パーク・アンド・ライド）の導入による環境対策や、急崖面における遊歩道の整備や給水施設、電力供給などを通じた訪問者に対する利便性や安全対策などの事業が着実に進められた。

これらの事業の推進には、わが国もODA（政府開発援助）などを通じて支援しているように、国際的な財政協力が寄与する部分もあるが、さらに潤沢な入場料収入が後押ししているであろうことは想像に難くない。

入場料は遺跡により異なるが、例えば常に国内外の訪問者で混雑しているアーグラのタージ・マハル廟の入場料をみると、外国人の場合は750Rs（インド・ルピー）と高額である。周辺国であるSAARC（南アジア地域協力連合）や、BIMSTEC（ベンガル湾技術経済協力機構）加盟国からの訪問者に対する配慮はあるが、為替レートで比較した場合、約1,500円（2009年3月現在）、さらに購買力平価で比較した場合に、その差は拡大するであろう。

一方、世界遺産に登録されていない大部分の石窟に目を転じると、その保存修復対策は遅遅

として進んでいないように見受けられ、近年その荒廃や破壊が加速している。従来からの岩質に起因するファサード（石窟前面外観）の崩落はもとより、石窟内に生息する多数のコウモリによる生物的な汚損や宗教的な破壊・改築など、自然・人為的な損壊は徐々に進行していることは否めない。

さらに、インドにおける大部分の石窟が分布している西インド地域では、近年モータリゼーションの発達と高速道路網の整備とが相俟って、従来はアクセスが困難な地理的環境にあった石窟寺院にも人びとが容易に訪問することができるようになり、その結果としてゴミの投棄や落書きなどの環境汚染や人的な損壊が急増している現状にある。

特に憂慮されるのが、各石窟に共通する落書きの増加である。監視人がいる世界遺産に登録された石窟や、聖地として宗教者が常駐している一部の石窟を除き、その惨状は目を覆うばかりである。実際、定着性の高い塗料で大きく書いた落書きや、鋭利な刃物で直接彫り込んだ落書きなどは、壁面や浮彫などを損傷せずに除去することは困難であろう。

観光地における落書きと一括したが、インドや仏教との関連で見た場合、例えばアンコール・ワットの落書き（日本語墨書）にみられる



マディア・プラデーシュ州ジュンナル石窟
ブド・レーナー群（第45～47窟）の落書き

ように、後世にその記述内容が歴史的に重要になる事例もある。アンコール・ワットには14例の日本語墨書がのこるが、その十字型回廊に森本右近太夫が認めた墨書（寛永9年=1632）は、当時の日本人がカンボジアを祇園精舎の国として認識・憧憬し、商業活動とともに仏教を介在とした交流があったことを推測させる歴史的史料である。ただし、このような事例は希有であることは言を俟たないであろう。

さらに、石窟寺院に遺存する石彫像をはじめとした重要な遺物に対する人為的な損傷行為も散見されるようになった。例えば、エローラー石窟から約50kmのピタルコーラー石窟は、その第3窟（チャイティア窟=祠堂）の天井部に紀元前の開鑿時の蓮華紋が遺存する石窟として重要であるが、その第4窟（ビハーラ窟=僧院）の前面に設けられた階段室の入口部左右に彫り出された一対の守門神浮彫のうち、近年その一体（左側）の頭部が壊され失われた。これは地域に住む子供の行為であるというが、かつては昼間のみであるが配置されていた監視人が削減された以降に起こった事件である。

文化遺産に対する落書きの問題は、ひとりインド共和国のみの問題ではない。わが国でも国内外の世界遺産登録遺跡や歴史的建造物などに対する落書き行為がマスコミで大きく報じられたことは記憶に新しい。

インド政府当局も事態を憂慮して、昨年から世界遺産である「デリーのクトゥブ・ミナールその建造物群」を舞台にした落書き防止（文化遺産保護）キャンペーンを繰り返し放映している。広大な国土に膨大な遺跡が分布する環境下では早急な改善は困難であろうが、監視人の配置をはじめとした保護対策が推進されることが希求される。

【主要引用・参考文献】

石澤良昭, 2004, 「1632年にアンコール・ワットを訪れた森本右近太夫一房の消息」『三笠宮殿下米壽記念論集』, 刀水書店。

神谷武夫, 1996, 『インド建築案内』, TOTO出版。

平岡三保子, 2000, 「西インドの石窟寺院—仏教石窟寺院の発生と展開—」『図版解説』『世界美術大全集東洋編第13巻インド(1)』, 小学館。

Dehejia, V., 1972, "Early Buddhist Rock Temples", Thames & Hudson, London.

Dhavalikar, M.K., 1984, "Late Hinayana Caves of Western India", Deccan College, Poona.

Fergusson, J. & Burgess, J., 1880, "The Cave Temples of India", 1988, reprint, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., New Delhi.



マディア・プラデーシュ州ピタルコーラー石窟
 (上左) 第4窟守門神浮彫 頭部(破壊前)
 (上右) 第4窟守門神浮彫 頭部(損壊後)
 (下) 第4窟基段全景



インド政府による文化遺産保護キャンペーン (1)



インド政府による文化遺産保護キャンペーン (2)
 (Incredible India, Ministry of Tourism, Initiative of Government of India, Do Not Spoil Indian Heritage, Every Monument is Our Treasure)